式　辞

校庭の桜の花びらが、暖かい春の風に舞う中、卒業生十四名全員がここに揃い、保護者のみなさまとともに、無事、卒業式を挙行できますことに、心より御礼申し上げます。

今年も感染防止のため、日頃より本校児童を支えて頂いている地域の方や来賓の方々の参列はありません。在校生の参加も叶いませんが、離れていても皆さんの門出を祝う気持ちは同じだと思います。

さて、卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。
先ほど、ひとりひとりに卒業証書を手渡し、本日をもって義務教育の六年間を終えることとなりました。皆さんにとっては、どんな小学校生活でしたか。

思えば昨年の春、皆さんは希望に満ちて最上級生となったはずでしたね。しかし、すぐに全国一斉休校となり、運動会をはじめ楽しみにしていた数々の行事も、予定通りにはできませんでした。

私たちは熊本地震を経験していたにもかかわらず、今まで当たり前であったことが、決して当たり前ではなかったことに、あらためて気づかされたのでした。

そんな中でも皆さんは、他の誰かのためにと、日々の活動の中で、朝から駐車場などを率先して掃除をしてくれました。また、後輩のためにと、たくさんの花壇を、真っ白なペンキできれいに塗り替えたりしてくれました。

このことだけではなく皆さんは、今できることに、精一杯取り組み、全校児童のみんなが笑顔でいられるようにと、人知れず目配りや気配りを当たり前のように行ってくれたのです。
大きな行事で皆さんが輝くことばかりを考えていた私たちに、本当に大切にしなければならないものは何かと気づかせてくれました。

今振り返ると、皆さんは、「心配り」という、人として何よりも大切な力を身につけてくれたのではないかと、うれしく思います。

また、十四名の仲間とともに、絶対に忘れてはならない大切な人がいますね。
どんな時も、どんなことがあっても、皆さんの一番近くで、いつもあたたかく見守ってくれた人。

そう、それは、家族です。
家に帰ると、いつも同じことで怒られたりして、嫌になったり、口げんかしたこともあったでしょう。

しかし、その一番近くにいた人たちは、皆さんのことが心配で、心配で、本当に心配でたまらないことに気づいていたでしょうか。

でも、そんな家族の方々が、いつも励まされた事があります。
それは、皆さんが時折見せてくれる、何気ない笑顔だったということを決して忘れないでください。

昨年あるコマーシャルの中で、私の心に残った言葉があります。それは、「見えないモノと闘ったこの一年は、見えないモノに支えられた一年だと思う」という言葉でした。　　これから、時に心が折れそうになることがあっても、ひとりひとりが大切に思う何かを忘れずに、これからの生活を送ってください。

くしくも、あの東日本大震災から、今年でちょうど十年。
あの時生きようと思っても叶わなかった人たちの思いも忘れずに、光り輝く自分だけの「夢」を、どうぞ、一番近くにいる家族と一緒に見つけてください。

さて、保護者の皆さま、お子さまのご卒業、誠におめでとうございます。
皆様からお預かりした貴重なこの六年もの間、温かく応援していただき、本当にありがとうございました。
中学校では大人へと成長するために必要な、大切な、大切な義務教育における、最後の三年間の学びが始まります。
お子様は、これまでとは違う新たな環境でまた人と出会い、新たな「見えない困難」に立ち向かうことになるかもしれません。
そんな時こそ、私たち大人が、子どもより「先に生まれた」者の責任として、明るい未来という希望に導いていく必要があると、この一年で学ばせていただきました。

終わりに、卒業生の皆さんの歌声を宝とし、夢と希望が大きく花開くことをお祈りして、式辞といたします。

令和三年三月二十四日
宇城市立小野部田小学校
校長　川端　保成